

『和漢兼作集』下巻の基礎的考察

後 藤 昭 雄

一

『和漢兼作集』は鎌倉時代中期に編纂されたと考えられる詩歌集である。「兼作」とは一人が漢詩と和歌の両方を作ることで、「和漢兼作集」は両方の詠作がある作者の詩と歌とを選録した集の意である。

本集は本来二十巻の集であった。岡山大学附属図書館池田家文庫蔵『歌書目録』に「和漢兼作集 二十巻」とある。しかし、いつの頃にか、巻十一以下の下巻が失われ、巻一から巻十（ただし巻十は初めの一部のみ）の上巻のみの零本として伝存していた。従来『和漢兼作集』の孤本とされてきた宮内庁書陵部蔵本がそれであり、唯一の伝本として、流布の諸

テキストの底本とされてきた。^①

そうしたなかで、二〇〇五年、冷泉家時雨亭叢書に時雨亭文庫所蔵の『和漢兼作集』が収録され、影印本として公刊された。第四十六巻『和漢朗詠集 和漢兼作集 尚歯会和歌』（朝日新聞社、「解題」は後藤昭雄）。

冷泉家時雨亭文庫本は鎌倉時代後期の写本で、書陵部本（近世初期写）の親本に当たり、今後は書陵部本に代わって『和漢兼作集』の基本となるべき本であるが、そのことと共に、本書が有する大きな価値は、一部ではあるものの、従来全く知られなかった下巻の本文を持つことである。一部ながら下巻が出現した。したがって、新出資料として、これを日本漢文学史に取り込んでいかなければならないが、一つ問題がある。それは乱丁があり、本文の続き具合を検討しなけれ

ばならないことである。本稿はその基礎作業である。

二

下巻は八丁が残るが、まず現状のとおりに翻刻する。(一)に入れた丁数は前述の影印本のそれである。上下二つの作品番号を付したが、上は現状に基づく通し番号である。下のゴチック体の数字については後に述べる。

(一二九ウ)

- | | | |
|-----|------------|---------|
| 1 1 | 長安月夜嘉陵思 | 疎勒風時故国愁 |
| | 竹生嶋 | 都良香 |
| 2 2 | 三千世界眼前尽 | 十二因縁心裏空 |
| | 和韵 | 法印円成 |
| 3 3 | 心々易乱一心少 | 事々無成万事非 |
| | 出家之後於西山題十韻 | |
| | 藤原光俊朝臣 | |
| 4 4 | 読誦夜深声漸老 | 坐禅日浅意猶慙 |
| | 寄讚州菅刺史 | 法印定円 |
| 5 5 | 無利無名無世事 | 有風有月有秋心 |

古寺春 法印公朝

(一二三〇オ)

(白紙)

(一二三〇ウ)

- | | | |
|-------|-----------------|----------|
| 6 11 | 僧院草深人事少 | 仙壇花脆鶴眠閑 |
| | 古寺 | 藤原宗実朝臣 |
| 7 12 | 禪樹檀那長有鶴 | 仏庭草創久於松 |
| | 遊東山古寺 | 藤原資隆朝臣 |
| 8 13 | 幽洞交親双白鶴 | 禪庵故旧一青松 |
| | 山中有仙室 | 式部大輔菅原文時 |
| 9 14 | 石床留洞風空私 | 玉案拋林鳥独啼 |
| 10 15 | 桃李不言春幾暮 | 煙霞無跡昔誰栖 |
| | | 民部卿藤原資長 |
| 11 16 | 巖室望雲宜指点 | 溪門逢鶴告来由 |
| | 閑中秋色変 | 按察使藤原行成 |
| | (一二三二オ) | |
| 12 35 | 春なく人のとふとき、しも | |
| | 題しらす | 前大納言藤原公任 |
| 13 36 | 桜花つゆにぬれつゝ、たてぬれは | |
| | いにしへしるきやとの庭かな | |

依旧有春心 無品輔仁親王

14 37 隋家堤廢柳猶緑 石氏園荒花独紅

宿翰林主人幽居 前権中納言藤兼光

15 38 貝葉露芳新仏閣 兔花牆透旧経營

長樂寺即事 惟宗孝言朝臣

16 39 蕭寺山深苔閣閣 藍溪水急石分流

山家即事 法性寺入道前関白太政大臣

17 40 欲将泉石付麋鹿 恐尚子孫詔帝王

(一三二ウ)

於陶化坊亭即事 無品輔仁親王

18 41 柳樹牆斜山影近 蓼花岸旧水声微

禪房偶吟 二品守覚法親王

19 42 槿籬露底争浮命 茶竈煙中扶病身

早秋 権律師隆昭

20 43 おもふたに露そとまらぬいまよりの

草のとさしの秋のゆふくれ

こもりゐて待ける秋のころ

徳大寺入道前太政大臣

21 44 すみよきもかきり有けり山里の

あさちかすゑに秋風そふく

二百首 九条前内大臣

22 45 山かつの我世の秋やしるからん

あふてからしるつたの山かさ

(一三三オ)

深山雨 参議藤原兼高

23 46 あしひきの山はよし野のおくのいは

しくる、空にとふ人もなし

人家有来客休息于新樹下

太皇太后宮権大夫源師時

24 47 林亭我醉独吟嘯 池榭客来共眺望

山家 贈参議藤原義忠

25 48 適有京華芳契客 門前按轡一来尋

前権中納言藤原長兼

26 49 竹石幽栖三畝窄 林亭生計一溪深

前権中納言藤原資実

27 50 山中隙地苔三畝 塵表生涯月一庭

(一三三ウ)

前権中納言藤原親經

28 51 登山臨水幽玄興 松柱石階儉素心

建保百首 光明峯寺入道前摂政左大臣

29
52

石のはし竹のまかきの草のいほに
松のあらしや涙そふらん

30
53

亀山殿にて 後嵯峨院御製
我やとのものかあらぬかあらし山
あるにまかせておつるたきつせ

31
54

遊古寺即事 前参議藤原脩範
当窓山色映朝日 落枕泉声和曉嵐
春宮大夫源師頼

32
55

山居
野径雨露春草緑 山郵雲薄夕陽紅

(一二三才)

33
17

籬東零落孤叢露 門外蕭疎老柳風
閑中景気幽 源親長

34
18

残灯背壁上陽院 落葉滿階南内秋
閑居偶吟 藤原資基

35
19

免裘旧卜残苔地 人事秋稀五柳家
閑居無外事 源道濟

36
20

性慵唯見籬花色 官冷不驚衙鼓声
閑中日月長 大江以言朝臣

37
21

陶門跡絶春朝雨 燕寝色衰秋夜霜
山家 大藏卿菅原為長

38
22

白雲不許出山思 玄鶴先知栽樹情
(一二三ウ)

39
23

世をのかれて後説侍ける
権大納言藤原教家
おき山(たけ)にあとををは誰もかくせとも
名までをうつむ人そすくなき

40
24

勒字百廿八首 法印定円
いとひいる世と秋山の苔ちこそ
身にさきたちて名は埋けれ

41
25

題不知 前権少僧都源信
しつかなる所はやすく有ぬへし
心すまさんかたのなきかな

42
26

山家秋歌 中納言紀長谷雄
吾家嶺外枕江干 浪響松声日長寒
(一二三四才)

43
27

世をのかれて高野山にすみける時
前参議藤原成頼
たかの山をくまで人のとひこすは
しつかにみねの月はみてまし
高光横川にてかしらおろし侍けるを

聞食てつかはされける

村上天皇御製

44 28 宮こより雲のやへたつおくやまの

横川の水や住よかるらん

寄山述懷 前権大納言藤原朝

45 29 さきたて、心は山にすむものを

家を出ぬといはぬ許そ

秋日禪林寺 藤原敦光朝臣

(一三四ウ)

46 30 松門未許逃名志 李部纔為送年官

河州広河寺 前権中納言藤兼光

47 31 鶴髪衰客驚暁水 免裘栖息約春雲

運転老将至 宮内卿藤原永範

48 32 昔遊覺舍花紅日 今住香山月白秋

大原禪居偶吟 民部卿平親範

49 33 宮闕拝趨多日夢 山林止住九年春

横川にこもりゐて侍けるころ上東門院

よりとはせ給たりければ

権中納言源顯基

50 34 世をすて、山に入にし身なれとも

なをこひしきの昔成けり

(一三五オ)

両朱閣 九条前内大臣

51 56 春柳瀉池波混養 青苔満院月徘徊

山居春曙 前権中納言藤原宗行

52 57 紫閣山西残月色 香鑪峯北遠鐘声

夏日言志 権中納言藤原資宣

53 58 玄圃台珠臨水白 松門山黛度江青

秋 前権中納言藤原親經

54 59 嵐夜更無排戸牖 月秋久不下楼台

地静只看花 藤原正家朝臣

55 60 荊門人跡空对雪 松戸日長独望春

題旧第 三統理平宿祢

(一三五ウ)

(白紙)

(一三六オ)

56 6 千花苑裏春風夢 一実観前暁月心

述懷 入道中務卿宗尊親王

57 7 花開葉落閑中観 昨是今非世上心

贈答 九条内大臣

58 8 在野在朝遊宦士 非文非武自由心

初て女につかはしける

大宰権帥源経信

59 9 年をへて思ふ心のをのつから

つもりてけふと成にけるかな

中将更衣に 醍醐天皇御製

60 10 紫の色に心はあらねともふかくそ人に

おもひそめつる

(一三六ウ)

(白紙)

三

八丁のうちには本文が書かれていない丁もあり、本文の途中から初まる丁もあり、本文に乱れがあることは一見して明らかである。これを整序しなければならない。

まず、一二九オ、一三〇オ、一三五ウ、一三六ウには本文が書かれていない。ただし、前節の翻刻には示さなかったが、一二九オには別筆で

上巻奥不足

下巻之端物続之

の書入れがある。上巻は途中で切れているが(巻十は一丁のみ)、下巻の断簡をこれに続けて書写したことを記している。

一三〇オと一三五ウの白紙は、その後、すなわち一二九ウと一三〇ウ、一三四ウと一三六オが不連続であることを示すために置かれたものであろう。前者を例にすると、一二九ウの末尾は詩題と作者、一三〇ウの一行目は詩句であり、形式的には続くかのように見えるが、じつは繋がらない(後述)。そのことを示すための白紙と考えられる。後者も同じであらう。

では一二九ウはどこへ繋がるのか。それを明らかにするには、当然のこととして内容を検討しなければならない。一二九ウの末尾は

古寺春 法印公朝

という詩題と作者名であるが、これは一三六オへ続く。その第一行は

千花苑裏春風夢 一実観前曉月心

という詩句であるが、これが「古寺春」の題による公朝の作であることは、この詩句が幸いに『別本和漢兼作集』⁽²⁾に採録されていることから、確認できる。五九六番詩。

この例と同じように、他の詩集に採録されていて、これにもとづいて本来のかたちを知ることができるものが、ほかにある。

一三〇ウの末尾は先の例と同じく詩題と作者名で、

閑中秋色変 按察使藤原行成

とあるが、一三一オの一行目は和歌の下句である。すなわちこの二つは不連続である。一三〇ウは一三三オへ繋がるのである。その一行目は

籬東零落孤叢露 門外蕭疎老柳風

という詩句であるが、これが「閑中秋色変ず」の題で詠まれた行成の作であることは、『行成詩稿』にあること⁽³⁾によって明らかになる。なお、『行成詩稿』では、下句は

門外蕭條、老殘陰

で、本文に異なるがある。

以上の二例、丁の順序を正さなければならない。

次に進もう。現状の丁の順序で繋がりを考えていくと、一二九ウと一三〇ウは共に第一行は詩句である。

129 長安月夜嘉陵思 疎勒風時故国愁

130 僧院草深人事少 仙壇花脆鶴眠閑

それぞれの前丁の末尾は詩題と作者名のはずであるが、そ

れに該当するものが八丁のいずれかにあるか。まず形式のうえでは一三五オは該当する。末尾は

題旧第 三統理平宿祢

である。では内容においてはどうか。題の「旧第に題す」の「旧第」は旧宅の意であるから、その詩には寂莫（あるいは荒涼）たる風景、また懐古の情などが詠まれていると考えられるが、二聯は共に当たらない。

一二九ウの

長安の月夜嘉陵の思ひ

疎勒^{そく}の風の時故国の愁ひ

の前句は白居易の詩を踏まえる。「江楼月」（『白氏文集』巻十四）に、

嘉陵江の曲と曲江の池と

明月は同じと雖も人は別離す

とある。いま白居易は長安（曲江）に、元稹は嘉陵江辺にある。遠く離れて同じ月を眺める親友を思い遣って詠んだ詩である。一二九ウの詩はこれを踏まえて、この長安の月夜、嘉陵にいる人はどのような思いで月を仰いでいるだろうか、という。後句の「疎勒」は現在の新疆ウイグル自治区のカシユガル。そこで風に吹かれながら遙かに故国を思うのである。

したがって、これは望郷を主題とする詩の一聯と考えられる。

一三〇ウの

僧院草深くして人事少し

仙壇花脆くして鶴眠りて閑かなり

は分かりやすいが、寺院の静寂を詠む。後句の「仙壇」は辞書的語義としては「仙人の居所」（『大漢和辞典』）であるが、平安朝詩では寺院の意で用いられる。

仙壇鶴眠りて洞花落ち

僧院人稀にして沙草繁し

（藤原敦光「城北精舎言」志）『本朝無題詩』卷十）

孤岸菊残りて秋九を送り

仙壇松老いて歳千を期す

（藤原周光「冬日参詣安楽寺聖廟」）『本朝無題詩』卷十）

詩』卷十）

なお、前者は一三〇ウの詩句と、詩境、表現ともに酷似する。

要するに、一二九ウと一三〇ウは共にその前に連接する丁はない。すなわち、いずれもそれぞれのまとまりの最初となる。

次の一三一才も同様である。第一行は、

春なく人のとふとき、しも

という歌の下句であるが、これへ連なる、歌の上句を末尾に持つ丁はない。すなわち、一三一才もまとまりの最初となる。ここで、以上の検証にもとづいて、丁の順序を見直してみ

I 一二九ウ—一三六才

II 一三〇ウ—一三三才・ウ—一三四才・ウ

III 一三一才・ウ—一三三才・ウ

となる。一二九ウ、一三〇ウ、一三一才がいずれも最初となること、一二九ウは一三六才へ、一三〇ウは一三三才へ続くことは確認した。一三三才から一三四へ、一三一才から一三二への繋がりとはもとのままであるが、現状で不自然さはなく、入れ換えるべき積極的な理由は見いだせない。

ここで残るのは一三五才のみとなる。これは、現状では一三四ウから続いており、一三四ウは歌が完結し、一三五才は詩題と作者名で始まり、形式上は一三四ウ—一三五才と続くとして差しつかえないようである。しかし、一三五丁は裏は白紙で断簡の体様を示しており、また一三四ウと一三五才の内容を見てみると、両者が繋がるとするのは躊躇される。

一三四ウの終わりの二首は

大原禪居偶吟

宮闕拜趨多日夢 山林止住九年春

横川にこもりゐて侍けるころ、上

東門院よりとはせ給たりければ

世をすてて山に入にし身なれども

なをこひしきの昔成けり

で、山寺での住まいを主題とする。一方、一三五才の初めの

二首は

両朱閣

春柳瀉池波滉養 青苔滿院月徘徊

山居春曙

紫閣山西残月色 香鑪峯北遠鐘声

で、寺院に特定せず広く住居である。

以上のことから、一三五才は一三四ウに続くとはみなさず

に、半丁のみであるが、単独で

IV 一三五才

とする。

下巻の八丁は以上のように整序される。

以上のように整序して付した通し番号が前掲のゴチック体の番号である。

四

整序するとこのようになるが、巻下に残る詩歌は六〇首である。ただし、35^上番は歌の下句のみであり、詞書、作者は未詳である。また1番・11番の詩句二首は詩題、作者名を欠いている。60番の次は逆に詩題、作者名のみが残る。

その内容、配列を見ると、次のようになるうか。

I

1 望郷

2 | 6 仏事

7、8 述懷

9、10 恋

II

11 | 13 寺院

14 | 16 仙家

17 | 21 閑居

22 | 34 隱遁・山居

III

35 (未詳)

36―38 懷旧

39―55 山家・山居

IV

まとまりで捉えるのが難かしい。

『和漢兼作集』は上巻は春夏秋冬で分類されている。そうすると、上巻は四季、下巻は雑と分類されている『和漢朗詠集』が先蹤として想起されるのであるが、これを比較の基準として考えて、本書下巻は小刻みであるという気がする。あるいは全く違った基準で捉えるべきものだろうか。

次に作者を見てみよう。以下のとおりである。数字は作品番号、() に入れたものは和歌である。

天皇・皇親

後嵯峨天皇 (53)

醍醐天皇 (10)

村上天皇 (28)

宗尊親王 7

守覚法親王 42

輔仁親王 37 41

諸臣⁽⁵⁾

以言(大江) 21

為長(菅原) 22

永範(藤原) 32

基家(藤原) (45)

義忠(藤原) 48

教家(藤原) (23)

経信(源) (9)

兼高(藤原) (46)

兼光(藤原) 31 38

顕基(源) (34)

顕朝(藤原) (29)

孝言(惟宗) 39

光俊(藤原) 4

公任(藤原) (36)

行成(藤原) 17

師時(源) 47

師頼(源) 55

資基(藤原) 19

資実(藤原) 50

資宣(藤原) 58

資長(藤原) 16

資隆	(藤原)	13
実基	(藤原)	(44)
脩範	(藤原)	54
親経	(藤原)	51 59
親長	(源)	18
親範	(平)	33
正家	(藤原)	60
成頼	(藤原)	(27)
宗行	(藤原)	57
宗実	(藤原)	12
忠通	(藤原)	40
長兼	(藤原)	49
長谷雄	(紀)	26
道済	(源)	20
敦光	(藤原)	30
文時	(菅原)	14 15
良香	(都)	2
良通	(藤原)	8 56
僧侶		
円成		3

源信 (25)
公朝 6
定円 5
隆昭 (43)

さらに一三五才、60番の後に、詩題と作者名があり、三統理平の詩が入集していたことが知られる。

以上のうち、藤原脩範、藤原成頼、藤原宗実、源親長、三統理平、都良香、円成は上巻には入集していない。

次に、詩句について、他の詩集に採録されているものを指摘しておくが、その一つに『別本和漢兼作集』があるので、これについて概略を述べる。

時雨亭文庫本（書陵部本）とは全く体裁を異にする本があり、「別本和漢兼作集」と称される。島津忠夫氏蔵本が唯一の伝本で『新編国歌大観』第六巻に収められている。本書は、通行本が上巻は四季である、すなわち部類されているのに対し、作者ごとにまとめられている。現存するのは巻六・七八の三巻であるが、それぞれ巻頭に「中納言」「参議」「非参議」とあり、作者の官位の順序に従って配列されている。

出典あるいは他出は次のとおりである。^⑥

2—別本404、和漢朗詠集・山寺583

- 14―和漢朗詠集・仙家 547
- 15―和漢朗詠集・仙家 548
- 17―行成詩稿
- 20―別本 494、本朝麗藻 93
- 21―別本 315、本朝麗藻 95、和漢朗詠集・閑居 622
- 22―別本 273
- 26―本朝文粹 28
- 30―本朝無題詩 596
- 39―本朝無題詩 537
- 40―本朝無題詩 722
- 49―資実長兼両卿百番詩合・雑
- 50―資実長兼両卿百番詩合・雑
- 54―別本 260

以上で『和漢兼作集』下卷（断簡）の詩歌を読む準備ができた。

〔注〕

- （1） 影印 笠間影印叢刊『御所本和漢兼作集』（笠間書院、一九七三年）。翻刻 図書寮叢刊『平安鎌倉未刊詩集』（明治書院、一九七三年）、『新編国歌大観』第六卷、私撰集編Ⅱ（角

川書店、一九八五年）。

- （2） 『別本和漢兼作集』については後述（第四節）。

- （3） 拙編『日本詩紀拾遺』（吉川弘文館、二〇〇〇年）参照。

- （4） 以下の作品番号は整序したゴチック体の数字である。

- （5） 名を音読し、五十音順。

- （6） テキストは以下のものにより、その作品番号を付す。和漢朗詠集―新編日本古典文学全集本、本朝麗藻―川口久雄・本朝麗藻を読む会『本朝麗藻簡注』、本朝文粹―新日本古典文学大系本、本朝無題詩―本間洋一『本朝無題詩全注釈』、資実長兼両卿百番詩合―群書類従文筆部。

（こ）とう・あきお 成城大学教授

〔付記〕

本稿は二〇〇九年度成城大学文芸学部特別研究助成金による共同研究「日本における漢字テキストの表象と文化の統合的研究」（代表者小島孝之）の成果である。